

「オバマ大統領と次期大統領トランプ氏」

2017年01月16日

オバマ米大統領は10日、シカゴで退任演説を行った。彼は「Change（変革）」「Yes We Can（私たちはできる）」をキャッチフレーズにして大統領に当選した。初めての黒人大統領で、米国社会の変革が期待された。オバマ大統領は人権意識が高く、プラハで行った「核なき世界」の演説のように平和を求める大統領であった。大統領が背負う重荷はあまりに重い。アフガニスタン、イラク戦争の後始末、リビア空爆、IS（イスラム国）掃討に関わる戦争問題、リーマンショックの経済危機からの再生、国民皆保険を図る医療制度改革（オバマケア）、銃規制問題、警官による黒人銃撃事件、貧富の格差がもたらす社会的荒廃などの対応を迫られた。イランとの核合意、キューバとの国交回復は評価されている。既成の価値観や政治勢力に抑え込まれ、期待されたほどの変革は達成できなかった、また、弱腰外交であったと言われていたが、正義と平和を追求する姿勢は一貫していた。退任演説で「民主主義」を求める言葉は聴衆の心を打った。「民主主義の維持には相違を超えて結束することが重要だ」「真偽を問わず、自分に都合の良い情報だけを受け入れる傾向は民主主義を脅かす」「私たちが恐怖に屈したとき、民主主義は崩れる。民主主義は当然あるものと見なせば、必ずその存在が危うくなる」。民主主義は違う考えや立場の人々を受け入れ、共にあることを不断の努力で、模索し続けることである。米国は民主主義を守ろうとして、多様性を受け入れ、活力ある社会を保って来た。次期大統領トランプ氏を強く意識した演説で、トランプ氏が反対するオバマケアや温暖化問題にも触れていた。最後は下記のように結んだ。「大統領としての最後のお願いは、あなた自身に変革を可能にする力があることを信じることだ。Yes We Did（私たちは成し遂げた）。Yes We Can（私たちはできる）。」

トランプ次期大統領は当選後、一方的なツイッターばかりで発信していたが、11日トランプタワーで、400人の報道陣を前に始めて会見を行った。不動産業で大成功した経営手腕を用いて、米国の経済を回復する国家運営をするという発言であった。「海外に生産拠点を移す企業には高い関税を課す」「私は最大の雇用創出者となる」「メキシコ国境での壁建設計画を早期に実現する」。メディアを名指しで攻撃した発言は驚くものであった。自分に気に入らない報道をしたメディアを「偽ニュースだ」と罵倒し、発言を封じた。メディアは権力の横暴をチェックすることを使命とし、権力者に真意を聞きただす義務がある。それに応答しない権力は最も危険である。トランプ氏は都合の良い者を「味方」とし、都合の悪い者を「敵」と見なす、二分法で対処している。これでは、民主主義の根幹を脅かす。閣僚人事が明らかになってきているが、経済を牽引する企業人、また、軍人上りが多いらしい。彼は「過激派組織 IS(イスラム国) 打倒でロシアと協力できる」と発言している。軍事的強硬策を取るのではないか。彼が「核のボタン」を握ることになる。米国のトランプ、ロシアのプーチン、中国の習近平、日本の安倍。知性を感じさせない、権力欲が旺盛な彼らが世界をリードすることになる。不安を覚えるのは私だけではないだろう。

米国の女優メリル・ストリープ氏はゴールデン・グローブ賞の受賞式で、名こそ出さなかったが、トランプ氏が障害のある記者の真似をしたことを鋭く批判した。心が砕けたと言い、「他人への侮辱は更なる侮辱を呼び、暴力は暴力を扇動する」と語った。そして、権力を監視する報道機関に対し、務めを果たすように訴えた。彼女のメッセージは多様性を常識とするハリウッド関係者に感動を与え、民主主義の何であるかを如実に示した。